

日本文法  
大辭典

松村明編

日本文法  
大辭典

松村明編

明治書院

## 序

わが国の文法学界においては、明治以来今日まで、多くの人々によりいろいろと研究が進められ、日本語の文法論として、幾多のすぐれた学説が提出されている。しかしながら、今日においても、事の性質上、学界の定説として、一つの文法論が定立したということにはなっていない。したがって、わが文法学界では、諸学説がそれぞれにその独自性を主張し、また、日本語の文法的諸事実についても、それぞれの学説にもとづいて、いろいろな論述が行なわれているのが現状である。他方、明治以来、国語の史的研究も活発に進められ、文法についての史的研究も多くの成果をあげてきている。今日においては、上代から現代に至る各時代の文法的諸事実については、かなり細かい点まで、いろいろと研究成果があげられているのである。

このように、今日のわが文法学界は、研究がいろいろと細分化され、その各領域において、それぞれの研究が相当深化してきている。したがって、それら文法学界の各領域における最新の研究成果をふまえて、文法論上の諸学説の特質や差違などを整理・記述し、文法的事実についての要点を記述した文法辞典の出現も当然要望されるわけである。編者は、十数年前にこの種の文法辞典の編集に参与したことがある。それは、文法論上の術語の解説、主要な助詞・助動詞や一部の動詞(敬語関係のものを含む)などについての意味・用法の概略の記述を内容とするものであった。これは、その時点では、それなりの役割を果たしたものと思われるが、何と云っても比較的限制られた期間内にまとめざるを得なかったものであり、編者としても、早晚全面的に改訂しなければならないものと思っていた。ちょうどその

ような折、今回また同じ明治書院から、前著よりもっと大きな文法辞典編集の依頼を受けた。そこで、編者は、前の経験をもとに構想を新たに、今日における文法学界の成果を十分にふまえた、まったく新しい内容のものをまとめることにした。

今回の編集に当たって、編者が特に留意したのは、次のような点である。

- 一、これまでの文法論に関する主要な諸学説を整理し、学説間の異同を明らかにするとともに、文法論上の術語については、その概念規定を明確にし、それぞれの術語の使い方についての問題点を指摘しようとしたこと。
- 二、右のような文法論上の術語については、また、それらの術語によって示される日本語の文法上の諸事実を、多くの用例をあげて、できるだけ具体的に説明しようとしたこと。

- 三、日本語において、文法上特に重要なはたらきをもつと思われる語彙（たとえば、助詞・助動詞をはじめ、動詞・形容詞など活用のある語等）について、その意味・用法などを、多くの用例とともに、できるだけ詳しく記述しようとしたこと。

- 四、特に、古典解釈の上で重要な役割を果たすと思われる語彙（たとえば、助詞・助動詞や敬語関係の動詞など）については、国語の史的研究に関する最新の研究成果をふまえ、意味・用法の変遷などについても、できるだけ細かく記述しようとしたこと。

- 五、現代共通語を正確に理解し、また、現代共通語で適切に表現することに資するために、現代共通語の助詞・助動詞の意味・用法などについても、多くの用例をあげて、できるだけ詳細に記述しようとしたこと。

要するに、この辞典は、わが国文法学界の今日までの成果を、できるだけ客観的に整理・記述し、その正確な理解を得るための基礎を提供するとともに、日本語の正しい読解、適確な表現のために、古語・現代語の両面にわたって、

文法上重要なはたらきをもつ語彙について、その用法などを詳しく明らかにしようとしたものである。本書の刊行が、現時点において、わが国の文法学界や文法教育界に寄与し、国語に関心を持つ方々の役に立つことができれば、編者としては幸いである。

本書は、その全体の構成や編集の細部については、すべて編者が責任をもって事に当たったが、各項目の執筆については、多くの方々の協力を仰いだ。それら執筆者の方々の芳名は凡例にしるしとおりである。編者からのいろいろな注文を心よく受け入れ、充実した内容の原稿をお寄せくださった執筆者各位に対しては、あつく御礼申しあげる。また、本書の企画・編集から出版に至るまでの一切の事にわたって、熱心に事を進めて下された、三樹社長をはじめとする明治書院の編集部その他の部局の方々に対しても、心から感謝申しあげる次第である。なお、本書の完成を見ず、途中で逝去された元編集部長鈴木正五氏の靈に対して、深く哀悼の意をささげたいと思う。

昭和四十六年八月

松村 明

## 凡例

- 1 この辞典は、国語学ならびに日本文法に関するおもな術語(事項を含む)について解説するとともに、日本語として文法上特に重要なはたらきをもつ語彙について、その用法・意味などを記述したものである。
- 2 項目の配列は、術語と語彙とを区別することなく、すべてかな表記による五十音順とした。この場合、術語および現代語の語彙については現代かなづかい、古語の語彙については歴史的かなづかいによる。なお、本書では、すべて、現代語とは明治時代以降のことばを指し、江戸時代末までのことばは古語として区別する。
- 3 見出し語のたてかたは次のとおりである。
  - (1) 術語関係のものについては、漢字書き・漢字かなまじり・かな書き(かたかな・ひらがな)など、それぞれの語の慣用の表記で示した。漢字書き・漢字かなまじりの場合には、その下にひらがなで読みかたを示した(現代かなづかいによる)。
  - (2) 語彙関係の項目についてはすべてかな書きとし、漢字の当てられものには、かっこ内に漢字を用いての書きかたを示した。この場合、かなづかいは、現代語の場合には現代かなづかい、古語の場合には歴史的かなづかいによる。
- 4 術語項目の解説は、次のような点について、それぞれの項目に応じ、適宜取りあげて記述するようにした。
  - ①定義・語義および内容の解説。
  - ②異説・異称など。
  - ③おもな学説上の差違。
- 5 ④現代語または古語における事実とその用例。  
 ⑤起源・成立および変遷の概要。  
 ⑥その他、問題となる点についての補説。  
 大項目および中項目の解説にあたっては、適宜小見出しを立てて記述するようにした。なお、解説の用語はできるだけ通用のものによることとした(ヤむを得ず特殊な用語を用いる場合には「」内に入れて、一般の用語との区別を明らかにした)。また、参照すべき必要のある関連項目は、解説文中あるいは解説文の終わりに「↓印を用いて示した。
- 6 語彙項目については、次のような点につき、適宜取り上げて記述した。
  - ①現代語・古語の区別。
  - ②所属する品詞の別。
  - ③活用のある語については活用の別(助動詞では活用のしかたそのものも)。また、動詞では、必要のある場合、自動詞・他動詞の別も。
  - ④おもな意味・用法と、それぞれの用例(古語の用例には、必要に応じて、難解な語句に、その語義の注解を付けた)。
  - ⑤起源・成立および変遷の概要。
  - ⑥学説上での取り扱いかたの差違。
  - ⑦その他、問題となる点についての補説。
- 7 語彙項目の解説については、品詞の別によって、記述のしかたに若干の差違がある。以下、動詞・形容詞・助動詞・助詞・その他の語のそれぞれについて、記述のしかたの要点をしるしておく。

## (1) 動詞

① 古語の動詞として基本的なものと、教語関係の動詞および補助動詞を取りあげ、解説した。

② 動詞項目では、原則として、すべての語について、古語・現代語の別、品詞名、活用の種類、おもな語義、時代による語義・活用などの変遷、各活用形の用例などを示した。

③ 一般の動詞では、特に「用例」の項に重点をおき、各活用形の用例をあげることに努めた。これに対して、教語関係の動詞（補助動詞を含む）では、語誌のほか、**【周】**「意味・用法」**【漢】**「補註」などの項を立てて、くわしく記述するようにした。

④ 動詞は、見出し語の下に、古語・現代語の別、品詞名、活用の種類などを次のように示した。

⑤ 動【四】 古語の動詞、四段活用。

⑥ 動【四】 古語の動詞、四段活用および下二段活用。

なお、自動詞と他動詞で活用が異なる場合には、その区別を次のように示す（自動詞・他動詞の区別は活用の違いに対応している場合を除く）。

⑦ 動【四】（自動）・【下二】（他動） 古語の動詞、四段活用（自動詞）および下二段活用（他動詞）。

右のほか、活用の種類を示す略号は次のとおりである。

【上二】 上二段活用

【下二】 下二段活用

【サ変】 サ行変格活用

【ラ変】 ラ行変格活用

⑧ 動詞の活用の記述に当たっては、なるべく、すべての活用形につき、その用例をあげるように努めた（もともと、語によつては、いくつかの活用形の用例を欠くものもある）。

各活用形の略号は次のとおりである。

● 未然形

● 連用形

● 音便形

● 終止形

凡 例

⑧ 連体形

⑨ 已然形

⑩ 命令形

各活用形の用例の掲出に当たっては、できるだけ時代の古いものからあげるようにした。音便形の用例についても、なるべく時代の古いものをあげるようにしたが、ここでは、時代がやや降っても、注意すべきもの（たとえば、「借った」など）は用例をあげるようにした。また、近世後期の江戸語の用例などでは、「仮定形」と扱ったほうがよいと思われるものもあるが、古語の場合には、すべて「已然形」で統一して示すことにした。

⑥ いわゆる完了の助動詞「り」が接続する活用形については、次のようにしてある。すなわち、上代の文献に見られる用例については、四段活用・サ行変格ともに命令形としたが、平安時代以降の文献に見られる用例については、四段活用では已然形、サ行変格では未然形とした（「り」の接続をすべて命令形とする説もあるが、学校文法での扱いかたなどを考慮して、本書では、右のようにしたのである）。

⑦ 同一語形で異なる活用の存する場合には、原則として、用いられた時代の古いものから列挙するようにした。ただし、その時代に大差のないときには、四段・上一段・上二段・下一段・下二段・カ変・サ変・ナ変・ラ変の順にあげることにした。

⑧ 活用が異なるにもかかわらず、活用形が同一の形（たとえば、同一語形の四段活用と上二段活用の各連用形など）で、しかも同時代に併用されている場合、どちらの活用に所屬させたらよいか、なかなか判定のつきにくいことがあるが、本書では、適宜いづれかの活用に組み入れて示しておいた。

⑨ 各活用形の用例は、なるべく單純語としてのものを掲げるようにした。しかし、時には、派生語形あるいは複合語形のもので示した場合もある（たとえば、「應る」の用例として、「い應る」を引くなど）。

⑩ 動詞の用例の項の終わりに、▽印の下に、古辞書（たとえば、「新撰字鏡」「日葡辞書」など）などからのものを参考例として引用して

いることもある。

①敬語動詞については、一つの項目の中で、補助動詞の場合も合わせて記述したこともあるが、主要な語には、補助動詞の場合を、本動詞とは別の項目として立ててある。その場合には、本動詞の解説文の終わりに↓を用いて、補助動詞としての項目をも参照するように指示した。

## (2) 形容詞

①形容詞では、古語の形容詞のうち、語構成からみて基本的なものとみられる語を取りあげて、解説した。

②形容詞は、見出し語の下に、古語・現代語の別、品詞名、活用の種類などを次のように示した。

㊦㊦(ク) 古語の形容詞、ク活用。

㊦㊦(シク) 古語の形容詞、シク活用。

③形容詞項目では、それぞれの語につき、ク活用・シク活用の別、語義の基本的なものをするす(うい(愛じ)「おほきい(大きじ)など、口語形で掲げた語では、活用の種類を省いた)とともに、その語の活用上の特色、語構成の上で注意すべき点、清濁など語形に関することなどについて、適宜記述するようにした。

④用例は、原則として、なるべく古い時代の文献に見られるものでも、ク活用・シク活用の別を見分けることができるようなものを掲出するようにした。形容詞の場合、用例はごく代表的なものを示すに止め、各活用形の用例をあげることとはしなかった。

## (3) 助動詞

①助動詞項目では、古語から現代語にわたり、ひろく多くの語を取りあげるようにした。単独の助動詞だけでなく、いくつかの語が複合したものも取りあげてある。原則として基本形をもって見出し語としたが、ときには、基本形以外に、他の活用形も見出し語としたものもある。

②助動詞は、見出し語の下に、古語・現代語の別、品詞名などを次のように示した。

㊦㊦(動) 古語の助動詞

㊦㊦(動) 現代語の助動詞

この場合、**㊦㊦**の揭示は、かなりひろくしてある。すなわち、単独の助動詞だけに限定せず、いくつかの助動詞が複合しているようなものについても、**㊦㊦**と示すことにした。

③助動詞は、原則として、どの語においても、語誌(語源を含む)・活用・接続・意味・変遷・補説の各項目について記述するようにした。ただし、現代語では、多くの場合、語誌・変遷の項は、その必要がないので省いた(もしその必要があれば、「補説」の項で記述するようにした)。右のうち、語誌は、各見出し語のはじめに書かれた部分で、ここでは、それぞれの語の語源や成立事情、助動詞として成立した以後の使われ方の概略などについて記述するようにした。もっともほとんどの場合、特に「語誌」という見出しを立てることは省いてある。これに対して、「変遷」の項では、上代から中古・中世・近世などの各時期にわたり、それぞれの語が、意味・用法などの点でどのように移りかわっていったかを、用例をあげて、できるだけ具体的に記述しようとした。

④「活用」・「接続」・「意味」の各項目では、できるだけ多くの用例をあげて、それぞれの語の使われかたを具体的に記述するようにした(現代語の活用で㊦は仮定形の略称)。用例は、活用や意味・用法などを明らかにする上でなるべく適切なものを選んで掲げた。

⑤それぞれの語の扱いかたなどについて、学説が分かれているような場合には、「補説」の項で言及するようにした。

## (4) 助詞

①助詞項目も、古語から現代語にわたり、ひろく多くの語を取りあげるようにした。単独の助詞だけでなく、いくつかの語が複合したのも取りあげてある。また、形式名詞で助詞的に用いられる



語や、助詞相当連語などもなるべく取りあげるようにした。

② 助詞は、見出し語の下に、古語・現代語の別、品詞名、助詞の種類名などを次のように示した。

㊦ 助詞・終助詞として用いられるもの。  
㊧ 助詞・終助詞として用いられるもの。

㊨ 助詞・終助詞として用いられるもの。  
㊩ 助詞・終助詞として用いられるもの。

この場合、㊦の揭示はかなりひろくしてある。すなわち、単独の助詞だけでなく、いくつかの助詞が複合しているようなものについても、㊦と示すことにした。もともと、このような場合には、格助詞・接続助詞など、助詞の種類に関する区分は示していない。なお、形式名詞で助詞的に用いられる語や、助詞相当連語などには、㊦と示すことをしていない。

③ 助詞は、原則として、どの語においても、語誌(語源を含む)・接続・意味・変遷・補説の各項目について記述するようにした。ただし、現代語では、多くの場合、語誌・変遷の項はほとんどその必要がないので省き、もしその必要があれば、「補説」の項で記述するようにした。

④ 語誌をはじめ、「接続」「意味」「変遷」「補説」など、各項目についての記述のしかたは、ほぼ助動詞の場合と同じである。

その他の語

① 動詞・形容詞・助動詞・助詞以外の語で、これらの語に関連するものも、必要に応じて、見出し語としてあげたものがある。これらの場合には、古語については㊦と、現代語については㊧と示すだけで、それ以外に品詞表示などはしなかった。たとえば、次のような場合がそれである。

すこし㊦㊧  
おこし㊦㊧  
あひだ㊦㊧  
あいだ㊦㊧  
おける㊦  
あける㊦

凡例

右のうち、「すこし」は副詞とすべきものであるが、本書では形容詞との関連で取りあげられた(語彙項目に副詞は取りあげていないので、「副」という品詞表示も省略した)。「あひだ(副)」「あいだ(副)」は形式名詞が助詞的に用いられたものであり、「において」「における」は助詞相当連語であるが、これらのものも、㊦という品詞表示はしないことにした。

② 古語の接尾語のおもな語については、「接辞」の項目の末尾に、「派生に関する接辞・語彙一覽」として分類・整理し、一括して掲げることとした。

7 用例については、次のように統一した。

(1) 現代語の用例は現代かなづかい、古語の用例は、原則として歴史的かなづかいによる。古語の用例でも、中世以降のものについては文献により原文とおりのかなづかいによったため、歴史的かなづかいとしては破格になるものもある。

(2) 用例は、原則としてひらがな漢字表記とした『万葉集』『記紀歌謡』などからの用例は、当該部分の万葉がな表記をかつこ内に示す。ただし、訓点資料による訓読文や漢文の読み下し文、抄物資料からの用例などはかたかな漢字表記とした。また、キリシタン関係のローマ字文からの用例では、原則として翻字によるひらがな漢字表記とした(特に発音とおりに示す必要がある場合などはかたかなで示すこともある)。

(3) 用例文の中で意味のわかりにくい語句などには、ハ( )内に、その意味や注解のことばをかたかなで示した。

8 出典名は、用例文の後に「」で示す。『竹取物語』『土左日記』『紫式部日記』『更級日記』など、書名だけで出典を示したものもあるが、文献によっては、書名だけでなく、巻名(源氏物語・草木)など・巻数(帯巻物語・三)など・段数(徒然草・一〇)などを示した。これらの点につき、なお、いくつかの場合を示せば、次のとおりである。

(1) 『古今集』『新古今集』などの勅撰集や『万葉集』では、書名と

歌大観番号を示した。○〔万葉集・一三六〕〔古今集・三六〕〔新古今集・二六〕など。その他の歌集では書名と巻数を示した。○〔貫之集・五〕〔古今六帖・一〕など。

(2) 物語・日記・隨筆などの古典作品や抄物などでは、多くは、書名のほかに、巻数・章名・段数などを示した。○〔古事記・上〕〔日本書紀・雄略〕(ただし、『記紀歌謡』は、『古事記・歌謡』〔日本書紀・歌謡〕とする)〔日本靈異記・中〕〔伊勢物語・二九〕〔宇津保物語・藤原の君〕〔采花物語・月の宴〕〔蜻蛉日記・中〕〔大鏡・道長〕〔枕草子・にくきもの〕〔今昔物語・三の二一〕〔宇治拾遺物語・一三六〕〔平家物語・祇王〕〔論語抄・三〕など。

(3) 特殊な文献では、書名に一本名や著者名などを添えて示すこともある。○〔延慶本平家物語・三〕〔天草本平家物語・四〕〔ロドリゲス・日本大文典〕など。

(4) 謡曲・狂言・御伽草子や近世の諸作品には、書名の上にジャンル名の略称を付けて示した。たとえば、次のとおりである。

謡曲―〔謡・隅田川〕・狂言―〔狂・虎清本文荷〕・御伽草子―〔伽・酒吞童子〕・浄瑠璃―〔浄・堀川波鼓〕・歌舞伎―〔伎・与話情浮名横櫛〕・仮名草子―〔仮・竹斎〕・浮世草子―〔浮・世間胸算用〕・読本―〔読・雨月物語〕・咄本―〔咄・聞上手〕・洒落本―〔洒・遊子方言〕・滑稽本―〔滑・浮世風呂〕・黄表紙―〔黄・金々先生栄花夢〕・合巻―〔合・偽紫田舎源氏〕・人情本―〔人・春色英対暖語〕

なお、近世の諸作品は、『丹波与作(丹波与作待夜の小室節)』『陸栗毛(東海道中陸栗毛)』『梅曆(春色梅児誉美)』など、少数のものを除いては、原則として略称を用いないこととした。

参考文献は、少数の項目では、その項の末尾に掲げた(タグミミックス)『変形成文法』『成層文法』『句構造文法』『數理文法論』などが、大部分の項目では特に揭示しなかった。しかし、巻末付録中の『国文法研究史年表』が全体に関する参考文献目録の役をも果たすことを意図

して作製されている。なお、各項目の解説中には参照すべき書物や論文名など、必要に応じて適宜示してある。

10 巻頭に「術語項目一覧」および「語彙項目一覧」を置き、本書に収められた全項目の総括的な把握に役立てようとした。

11 巻末には、付録としての「時代別国語活用表」「国文法字説対照表」「国文法研究史年表」の三つを載せた。これらのものに関しては、各表の冒頭に示した凡例に、その内容の要点を述べてある。

12 各項目の執筆者とその執筆分担は次のとおりである(五十音順)。

青木恰子(古語格助詞・係助詞関係語彙)・池上秋彦(体言・文法範疇関係語彙)・市川孝(文・文章関係語彙)・奥津敦一郎(文法総記関係語彙)・加藤彰彦(表記・語彙関係語彙)・神谷肇(言語単位関係語彙)・国広哲弥(言語一般関係語彙)・倉持保男(現代語副助詞・接続助詞関係語彙)・小松寿雄(古語歌謡助詞および現代語終助詞・間投助詞関係語彙)・阪田雪子(現代語格助詞・係助詞関係語彙)・坂梨隆三(活用関係語彙)・時代別国語活用表)・白藤礼幸(派生に関する接辞・語彙一覧)・杉崎一雄(古語格助詞関係語彙)・鈴木一彦(言語一般・品詞分類・副用言関係語彙)・古語係助詞関係語彙)・鈴木英夫(古語助詞関係語彙)・橘豊(文法範疇関係語彙)・田中章夫(現代語助詞関係語彙)・辻村敏樹(敬語関係語彙)・西田直敏(古語接続助詞関係語彙)・林巨樹(言語一般・文章・修辭関係語彙)・藤井正(文法範疇関係語彙)・古田東朔(用言関係語彙)・水谷静夫(言語一般・文法総記関係語彙)・宮地敦子(助詞関係語彙)・古語副助詞関係語彙)・宮地裕(文法総記関係語彙)・山口明穂(活用・助詞関係語彙)・古語格助詞・副助詞・終助詞・間投助詞関係語彙)・国文法字説対照表)・国文法研究史年表)・山口佳紀(形容詞・形容動詞関係語彙)・古語形容詞関係語彙)・時代別国語活用表)・湯川恭敏(文法範疇関係語彙)・吉田金彦(助詞関係語彙)・古語助詞関係語彙)・渡辺実(文の成分・陳述関係語彙)

なお、古語助詞関係語彙の執筆には宮沢俊雅・安田尚道が協力した。これらの執筆者名は、各項目ごとに解説文の終わりに掲げた。

# 術語項目一覽

## 1 言語一般

|           |     |
|-----------|-----|
| 話しことば     | 六六九 |
| 口ことば      | 一六八 |
| 口語        | 三三三 |
| 文字言語      | 四三三 |
| 書きことば     | 九七  |
| 文語        | 七三  |
| 標準語       | 七〇  |
| 共通語       | 一六八 |
| 方言        | 七六六 |
| 屈折語       | 一八〇 |
| 膠着語       | 三三三 |
| 孤立語       | 三二六 |
| 抱合語       | 七六六 |
| 音         | 三三三 |
| 言語        | 三三三 |
| 成立条件(言語の) | 三三三 |
| 外形        | 九一  |
| 形式        | 一九三 |
| 言語形式      | 三三六 |

|          |     |
|----------|-----|
| 内部言語形式   | 七六  |
| 外部言語形式   | 九一  |
| 自由形式     | 三三三 |
| 音声形式     | 七九  |
| 付属形式     | 三三三 |
| 言語意識     | 三三三 |
| 言語行動     | 三三六 |
| 言語活動     | 三三三 |
| ランガージュ   | 九八  |
| ラング      | 九八  |
| パロール     | 七〇三 |
| 発話       | 六六八 |
| 発話行動     | 六六八 |
| 発話段階     | 六六九 |
| 構成的言語観   | 三三三 |
| 言語過程説    | 三三三 |
| 主体       | 三三〇 |
| 素材       | 三三九 |
| 場面       | 六六八 |
| 入子型構造    | 七〇  |
| 風呂敷型統一形式 | 七〇  |

|           |     |
|-----------|-----|
| 天秤型統一形式   | 三三三 |
| 零記号(ゼロ記号) | 九三  |
| 語形論       | 三三三 |
| 言語類型学     | 三三六 |
| 計量国語学     | 三三三 |
| 2 文法総記    |     |
| 文法        | 七三  |
| 語法        | 三三三 |
| 文典        | 七三一 |
| 文法論       | 七三〇 |
| 説明文法      | 七三〇 |
| 記述文法      | 一七〇 |
| 規範文法      | 一六二 |
| 解釈文法      | 九一  |
| 就解文法      | 三三三 |
| 表現文法      | 七三〇 |
| 学校文法      | 一六  |
| 教科文法      | 一六  |
| 実用文法      | 三三三 |

|            |     |
|------------|-----|
| 機能文法       | 一六〇 |
| 文語文法       | 七三  |
| 口語文法       | 三三三 |
| 一般文法       | 三三  |
| 歴史文法       | 九三  |
| 比較文法       | 七〇  |
| 対照文法       | 七三  |
| タグミックス     | 三三三 |
| 生成文法       | 三三三 |
| 変形生成文法     | 七三  |
| 変形文法       | 七三  |
| 成層文法       | 三三三 |
| 句構造文法      | 一三三 |
| 文法的事実      | 七三  |
| 文法上許容すべき事項 | 七三  |
| 文法学        | 七三  |
| 数理文法論      | 七三  |
| 文法史        | 七三  |
| 形態論        | 一六  |
| 文法形態論      | 七三  |
| 形態論        | 一六  |

|        |    |
|--------|----|
| 形態素    | 一七 |
| 意味     | 一七 |
| 機能     | 一八 |
| 機能     | 一八 |
| 3 言語單位 |    |
| 言語單位   | 二六 |
| 文章     | 二七 |
| 文章     | 二七 |
| 文      | 二七 |
| 文節     | 二八 |
| 文素     | 二九 |
| 語節     | 二九 |
| 連文節    | 二九 |
| 單語     | 三〇 |
| 語      | 三〇 |
| 連語     | 三一 |
| 語構成    | 三一 |
| 單純語    | 三二 |
| 派生語    | 三二 |
| 複合語    | 三三 |
| 合成語    | 三三 |
| 疊語     | 三三 |
| 接辭     | 三三 |
| 接頭語    | 三三 |
| 接尾語    | 三三 |
| 語基     | 三三 |
| 語根     | 三三 |

4 品詞分類

|       |    |
|-------|----|
| 品詞    | 七二 |
| 品詞分類  | 七二 |
| 品詞論   | 七二 |
| 品詞の転成 | 七三 |
| 自立語   | 七三 |
| 付屬語   | 七三 |
| 自用語   | 七三 |
| 副用語   | 七三 |
| 陳述語   | 七三 |
| 關係語   | 七三 |
| 觀念語   | 七三 |
| 概念語   | 七三 |
| 実詞    | 七三 |
| 実體詞   | 七三 |
| 詞     | 七三 |
| 小詞    | 七三 |
| 辭     | 七三 |
| 不變化詞  | 七三 |
| 變化詞   | 七三 |
| 5 体言  |    |
| 体言    | 七三 |
| 形式体言  | 七三 |
| 準体言   | 七三 |

6 用言

|         |    |
|---------|----|
| 名詞      | 七三 |
| 準名詞     | 七三 |
| 実名詞     | 七三 |
| 固有名詞    | 七三 |
| 普通名詞    | 七三 |
| 形式名詞    | 七三 |
| 時の名詞    | 七三 |
| 吸着語     | 七三 |
| 不完全名詞   | 七三 |
| 代名詞     | 七三 |
| 人稱代名詞   | 七三 |
| 人代名詞    | 七三 |
| 指示代名詞   | 七三 |
| 事物代名詞   | 七三 |
| 物主代名詞   | 七三 |
| 疑問代名詞   | 七三 |
| 反射代名詞   | 七三 |
| 反照代名詞   | 七三 |
| 反射指示代名詞 | 七三 |
| 不定代名詞   | 七三 |
| 再帰代名詞   | 七三 |
| 關係代名詞   | 七三 |
| コソアド    | 七三 |
| 助數詞     | 七三 |
| 助數詞     | 七三 |

7 活用

|            |    |
|------------|----|
| 用言         | 七三 |
| 形式用言       | 七三 |
| 補助用言       | 七三 |
| 活用語        | 七三 |
| 活用連語       | 七三 |
| 動詞         | 七三 |
| 自動詞        | 七三 |
| 他動詞        | 七三 |
| 他動詞        | 七三 |
| 可能動詞       | 七三 |
| 再帰動詞       | 七三 |
| 補助動詞       | 七三 |
| 形式動詞       | 七三 |
| 存在詞        | 七三 |
| 形容詞        | 七三 |
| 補助活用(形容詞の) | 七三 |
| 補助形容詞      | 七三 |
| 形式形容詞      | 七三 |
| 形容動詞       | 七三 |
| 活用         | 七三 |
| 動詞式活用      | 七三 |
| 上一段活用      | 七三 |
| 一段活用       | 七三 |
| 下一段活用      | 七三 |
| 上二段活用      | 七三 |

|         |     |
|---------|-----|
| 二段活用    | 六三〇 |
| 下二段活用   | 三〇九 |
| 四段活用    | 八九四 |
| 五段活用    | 三三九 |
| 変格活用    | 七二  |
| カ行変格活用  | 六九  |
| サ行変格活用  | 二六〇 |
| 三段活用    | 二七六 |
| ナ行変格活用  | 六七  |
| ラ行変格活用  | 六〇  |
| 形容詞式活用  | 二〇一 |
| 形容詞型活用  | 二〇一 |
| ク活用     | 一七  |
| シク活用    | 一六六 |
| 形容動詞式活用 | 二〇四 |
| 形容詞型活用  | 二〇四 |
| カリ活用    | 二〇四 |
| ナリ活用    | 一六五 |
| ダナ活用    | 四四三 |
| タリ活用    | 四四六 |
| 強変化     | 一六七 |
| 弱変化     | 三三〇 |
| 混合変化    | 二四九 |
| 活用語尾    | 二二  |
| 語幹      | 三三  |
| 活用形     | 二二  |
| 基本形     | 一六  |
| 未然形     | 八八  |

|     |     |
|-----|-----|
| 否定形 | 七〇八 |
| 連用形 | 九三〇 |
| 中止形 | 四七五 |
| 副詞形 | 七三  |
| 終止形 | 三三  |
| 連体形 | 九六  |
| 已然形 | 一一  |
| 仮定形 | 一一五 |
| 命令形 | 八八  |
| 連用法 | 九二  |
| 中止法 | 四三  |
| 副詞法 | 七三  |
| 接続法 | 一六五 |
| 終止法 | 三三  |
| 連体法 | 九二  |
| 命令法 | 八三  |
| 仮定法 | 一一五 |
| 音便  | 一〇  |
| 音便形 | 八   |
| イ音便 | 一六  |
| ウ音便 | 四   |
| 促音便 | 三六  |
| 撥音便 | 六七  |

8 副用言

|     |    |
|-----|----|
| 副用言 | 七三 |
| 副詞  | 七〇 |

|      |     |
|------|-----|
| 接続副詞 | 一六五 |
| 感動副詞 | 一六  |
| 情態副詞 | 三三  |
| 程度副詞 | 五六  |
| 陳述副詞 | 四七六 |
| 指示副詞 | 二六八 |
| 連体詞  | 九七  |
| 副体詞  | 七三  |
| 疑問詞  | 一六四 |
| 接続詞  | 三六三 |
| 感動詞  | 一四  |
| 感嘆詞  | 一四  |
| 間投詞  | 一四  |
| 冠詞   | 一四  |

9 付属語

|        |    |
|--------|----|
| 助動詞    | 三三 |
| 動辭     | 四四 |
| 複語尾    | 七九 |
| 受身の助動詞 | 四  |
| 自発の助動詞 | 三〇 |
| 使役の助動詞 | 二八 |
| 可能的助動詞 | 二五 |
| 尊敬の助動詞 | 四七 |
| 敬讓の助動詞 | 一四 |
| 丁寧の助動詞 | 三七 |
| 推量の助動詞 | 三三 |

|        |     |
|--------|-----|
| 意志の助動詞 | 三   |
| 打消の助動詞 | 一   |
| 希望の助動詞 | 一六二 |
| 伝聞の助動詞 | 五三  |
| 推定の助動詞 | 三四  |
| 詠嘆の助動詞 | 三   |
| 感動の助動詞 | 一四七 |
| 様態の助動詞 | 八三  |
| 指定の助動詞 | 二九七 |
| 比況の助動詞 | 七〇  |
| 時の助動詞  | 五九  |
| 過去の助動詞 | 一〇三 |
| 完了の助動詞 | 一〇  |
| 回想の助動詞 | 九   |
| 不変化助動詞 | 七七  |

◇

|            |    |
|------------|----|
| 助詞         | 三六 |
| 靜辭         | 三六 |
| てにをは       | 三三 |
| 助詞相当連語     | 三三 |
| 後置詞        | 三三 |
| 前置詞        | 三〇 |
| 格助詞        | 一〇 |
| 接続助詞       | 六四 |
| 副助詞        | 七三 |
| 係助詞(かかり助詞) | 九四 |
| 終助詞        | 三六 |
| 間投助詞       | 一七 |

10 文

|         |    |
|---------|----|
| 準体助詞    | 三三 |
| 並立助詞    | 三七 |
| 連体助詞    | 六八 |
| 準副助詞    | 三三 |
| 準副体助詞   | 三三 |
| 文論      | 三三 |
| 構文論     | 三七 |
| 文章論     | 三七 |
| シンタククス  | 三三 |
| コンポジション | 三三 |
| 段落      | 四一 |
| 文脈      | 三七 |
| 文の種類    | 三七 |
| 単文      | 四一 |
| 複文      | 三七 |
| 重文      | 三七 |
| 合文      | 三三 |
| 有属文     | 六八 |
| 有節文     | 六八 |
| 平叙文     | 三七 |
| 疑問文     | 一五 |
| 感嘆文     | 一五 |
| 命令文     | 六八 |
| 一語文     | 三三 |
| 喚体      | 一五 |

|         |    |
|---------|----|
| 述体      | 三三 |
| 文の構造    | 三七 |
| 文の連接    | 三七 |
| 文型      | 三三 |
| 基本文型    | 一六 |
| 基礎文型    | 一六 |
| 断句      | 四六 |
| 句       | 一七 |
| 節       | 三三 |
| 音單語     | 一六 |
| 文の成分    | 三七 |
| 主語      | 三六 |
| 総主語     | 三三 |
| 題目語     | 四〇 |
| 主題      | 三三 |
| 述語      | 三〇 |
| 修飾語     | 三三 |
| 被修飾語    | 三〇 |
| 連体修飾語   | 三六 |
| 形容詞的修飾語 | 三〇 |
| 連用修飾語   | 三三 |
| 副詞的修飾語  | 三三 |
| 連用語     | 三〇 |
| 補語      | 三六 |
| 客語      | 一五 |
| 目的語     | 八三 |
| 対象語     | 四七 |

11 文法範疇

|      |    |
|------|----|
| 並立語  | 三三 |
| 接続語  | 三三 |
| 独立語  | 三三 |
| 提示語  | 三六 |
| 提示部  | 三六 |
| 切れ続き | 一六 |
| 言い切り | 一七 |
| 保り結び | 三三 |
| 呼応   | 三三 |
| 叙述   | 三三 |
| 陳述   | 四六 |
| 文法範疇 | 三七 |
| 意義範疇 | 一六 |
| 機能範疇 | 一六 |
| 形態範疇 | 一六 |
| 屈折変化 | 三三 |
| 曲折   | 三三 |
| 曲用   | 一六 |
| 性    | 三三 |
| 数    | 三三 |
| 格    | 一〇 |
| 主格   | 三三 |
| 所有格  | 三三 |
| 目的格  | 八三 |

|      |    |
|------|----|
| 述格   | 三三 |
| 修飾格  | 三三 |
| 属格   | 三三 |
| 对格   | 三三 |
| 与格   | 三三 |
| 呼格   | 三三 |
| 人称   | 三三 |
| 自称   | 三三 |
| 对称   | 三三 |
| 他称   | 三三 |
| 不定称  | 三三 |
| 一人称  | 三三 |
| 二人称  | 三三 |
| 三人称  | 三三 |
| 近称   | 三三 |
| 中称   | 三三 |
| 遠称   | 三三 |
| 法    | 三三 |
| ムード  | 三三 |
| 叙法   | 三三 |
| 叙述法  | 三三 |
| 叙想法  | 三三 |
| 条件法  | 三三 |
| 直接法  | 三三 |
| 平叙表現 | 三三 |
| 咏嘆表現 | 三三 |
| 感動表現 | 三三 |

情意表現……………三三〇

命令表現……………三三〇

禁止表現……………一六九

疑問表現……………一六四

希望表現……………一六三

推量表現……………三三三

伝聞表現……………三三三

勧誘表現……………一六九

指定表現……………三三三

否定表現……………七〇八

二重否定……………三三九

反語表現……………七〇三

比況表現……………七〇六

婉曲表現……………三三〇

比較変化……………七〇五

原級……………三三三

比較級……………七〇四

最上級……………三三三

話法……………九三〇

直接話法……………七〇六

間接話法……………一三五

◇

時……………三三八

テンス……………三三三

時制……………二八九

歴史的現在……………九三〇

アスペクト……………三

進行形……………三三六

アオリスト……………一

態……………四三

ウァイス……………三三

進行態……………三三三

動作態……………三三三

静止性動作態……………三三一

継続態……………一六六

反復態……………七〇四

模態……………八九二

将来態……………三三六

既現態……………一六六

既現態……………一三三

始動態……………三三六

終結態……………三三三

相……………三三三

中相……………四七六

能相……………三三三

敬相……………一六六

所相……………三三三

勢相……………三三三

能動……………三三三

受動……………三三一

受身……………三三一

可能……………一三三

使役……………一六六

自発……………三三〇

自然可能……………二九

12 敬語

敬讓……………一四四

敬語……………一六九

敬語法……………一六一

待遇表現……………三三三

絶対敬語……………三三三

関係敬語……………一三三

尊敬語……………四〇七

謙讓語……………三三七

尊大語……………四〇九

丁寧語……………三三六

敬体……………一六七

敬称……………一九四

13 文章

文章の構造……………七三三

文章の種類……………七三三

文章の様式……………七三六

文体……………七三九

文体論……………七三〇

言文一致……………二八

説明文……………三三七

論説文……………九三三

記事文……………一七〇

実用文……………三三

報告文……………七三〇

公用文……………三三三

法令文……………七三〇

判決文……………七三〇

詔勅……………三三七

上表文……………三三七

祝詞……………六三三

宣命……………三三〇

風諭文……………七三三

願文……………四〇九

祝願文……………三三六

会話文……………三三

手紙文……………三三六

書簡文……………三三六

候文体……………三三三

かな文……………三三三

雅文……………二二六

和文……………九三〇

擬古文……………一三三

漢文……………一六六

東鑑体……………三三

変体漢文……………七三三

和漢混清文……………六三三

かな交じり文……………一三三

漢字かな交じり文……………一三三

普通文……………七三六

俳文……………六三三

写生文……………三三

|     |    |
|-----|----|
| 散文  | 三六 |
| 韻文  | 三六 |
| 口語文 | 三三 |
| 文語文 | 三三 |
| 口語体 | 三三 |
| 文語体 | 三三 |

14 修辭

|     |    |
|-----|----|
| 修辭法 | 三三 |
| 強調  | 三六 |
| 対句  | 三六 |
| 枕詞  | 三九 |
| 掛詞  | 三九 |
| 序詞  | 三九 |

語彙項目一覧

1 動詞〔古語〕

|           |    |
|-----------|----|
| あかす(明かす)  | 一一 |
| あく(明く)    | 一一 |
| あく(開く・明く) | 一一 |
| あける(明ける)  | 一一 |

|     |    |
|-----|----|
| 擬人法 | 一七 |
| 縁語  | 一七 |

15 表記

|           |    |
|-----------|----|
| 五十音図      | 三三 |
| 表記法       | 七〇 |
| 正書法       | 三六 |
| わかち書き     | 三九 |
| 送りがな      | 三九 |
| かなづかい     | 三三 |
| 現代かなづかい   | 三七 |
| 歴史かなづかい   | 三三 |
| 定家かなづかい   | 三五 |
| 上代特殊かなづかい | 三六 |

16 語彙

|         |    |
|---------|----|
| 句読点     | 一〇 |
| おどり字    | 〇  |
| 語彙      | 三〇 |
| 語彙論     | 三〇 |
| 基本語彙    | 三三 |
| 同音語     | 三三 |
| 類音語     | 三三 |
| 同義語     | 三三 |
| 類義語(類態) | 三三 |
| 混種語     | 三九 |
| 混成語     | 三九 |
| 対義語     | 四一 |

|            |    |
|------------|----|
| あそはす(遊ぶ)   | 一四 |
| あそはす(補助動詞) | 一五 |
| あそぶ(遊ぶ)    | 一六 |
| あつかふ(扱ふ)   | 一六 |
| あづかる(与る)   | 一七 |
| あづかる(預る)   | 一七 |
| あつまる(集まる)  | 一七 |

|               |    |
|---------------|----|
| あはれむ(哀れむ)     | 一八 |
| あふ(会ふ・逢ふ)     | 一八 |
| あむ(編む)        | 一九 |
| あやしむ(奇しむ・怪しむ) | 二〇 |
| あゆむ(歩む)       | 二〇 |
| あらはす(表はす・現はす) | 二一 |

|               |    |
|---------------|----|
| あらはる(表はる・現はる) | 二一 |
| 顕はる           | 二一 |
| あらふ(洗ふ)       | 二一 |
| あらぶ(荒ぶ)       | 二一 |
| あらびる(荒びる)     | 二一 |
| あり(有り)        | 二一 |
| あり(補助動詞)      | 二一 |

|           |    |
|-----------|----|
| 反対語       | 七〇 |
| 外来語       | 九  |
| 漢語        | 一四 |
| 擬声語       | 一六 |
| 擬態語       | 一六 |
| 略語        | 九〇 |
| 慣用語       | 三〇 |
| 慣用語       | 三〇 |
| イデオロム     | 三六 |
| 類推        | 三三 |
| 誤った回帰     | 〇  |
| 交錯        | 三三 |
| 混淆        | 三九 |
| コンタミネーション | 三〇 |



ある(有る)……………四  
 ありく(歩く)……………四  
 あるく(歩く)……………五  
 ある(荒る)……………四  
 あんす……………五  
 いかる(怒る・怒る)……………元  
 いく(行く)……………元  
 いく(生く)……………三  
 いさぢる……………三  
 いざなふ(誘ふ)……………三  
 いそがす(急がす)……………三  
 いたす(致す)……………三  
 いたたく(戴く)……………三  
 いでます(出で坐す)……………三  
 いはふ(肴ふ・祝ふ)……………六  
 いふ(言ふ)……………六  
 いまさうす……………元  
 いまさふ……………三  
 いましがり……………三  
 います(坐す)〔四・サ変〕……………三  
 います(坐す)〔下二〕……………三  
 います(補助動詞)……………三  
 います(がらふ)……………三  
 います(が)……………三  
 いませ(怠む)……………三  
 いやしむ(卑しむ)……………三  
 いらせらる……………三

いらっしやる……………六  
 いらふ(答ふ)……………六  
 いる(入る)……………三  
 いる(鑄る)……………三  
 いる(射る)……………三  
 う(得)……………三  
 \*えに……………三  
 うう(植う)……………四  
 うかがふ(窺ふ・伺ふ)……………三  
 うかがふ(伺ふ)……………三  
 うかぶ(浮かぶ)……………三  
 うかる(浮かる)……………三  
 うく(受く)……………三  
 うく(浮く)……………三  
 うけたまはる(承る)……………三  
 うけたまうる(承る)……………三  
 うごかす(動かす)……………三  
 うごく(動く)……………三  
 うしなふ(失ふ)……………三  
 うす(失す)……………三  
 うたがふ(疑ふ)……………三  
 うたふ(歌ふ)……………三  
 うなづく(頷く)……………三  
 うむ(生む・産む)……………三  
 うむ(埋む)……………三  
 うめく(呻く)……………三  
 うめる(埋める)……………三  
 うらむ(恨む)……………三

うる(売る)……………三  
 うれる(売れる)……………三  
 うれふ(愁ふ・患ふ・憂ふ)……………三  
 おいりある(お入りある)……………三  
 おく(起く)……………三  
 おきる(起きる)……………三  
 おしやる……………三  
 おしやんす……………三  
 おしらる……………三  
 おせらる……………三  
 おそる(恐る)……………三  
 おちやる……………三  
 おんぢやる……………三  
 おつ(落つ)……………三  
 おつ(怖つ)……………三  
 おっしやる……………三  
 おとす(落す)……………三  
 おとす(威す・嚇す)……………三  
 おとる(劣る)……………三  
 おどろく(驚く)……………三  
 おはさうす……………三  
 おはさふ……………三  
 おはしあふ……………三  
 おはしまさうす……………三  
 おはしまさふ……………三  
 おはします(御座します)……………三  
 おはします(補助動詞)……………三  
 おはす(御座す)……………三

おはす(補助動詞)……………六  
 おふ(生ふ)……………六  
 おふ(負ふ)……………六  
 おふ(追ふ)……………六  
 おほす(仰す)……………三  
 おほす(思す)……………三  
 おほしめす(思し召す)……………三  
 おほとのごもる(大殿籠る)……………三  
 おほんのごもる(御殿籠る)……………三  
 おほふ(覆ふ)……………三  
 おほほす(思ほす)……………三  
 おほまします……………三  
 おほゆ(寛ゆ)……………三  
 おまうしやる……………三  
 おます……………三  
 おまします……………三  
 おまらす……………三  
 おまゐる……………三  
 おもしやる……………三  
 おもふ(思ふ)……………三  
 おもほす(思ほす)……………三  
 おもほしめす(思ほし召す)……………三  
 おゆ(老ゆ)……………三  
 およぶ(及ぶ)……………三  
 おりやある(補助動詞)……………三  
 おる(織る)……………三